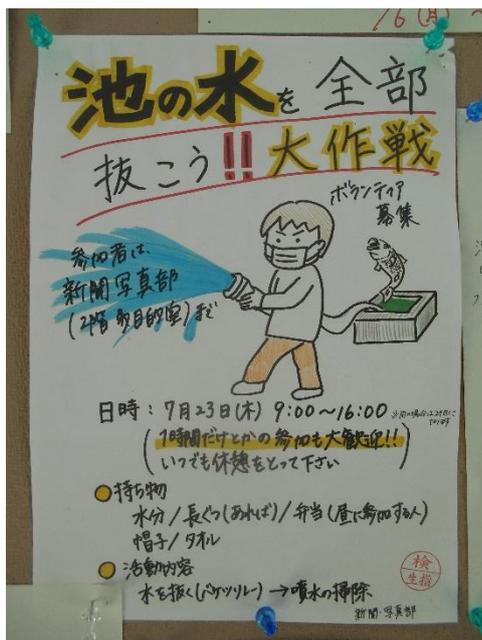


生き生き津高

Vol.22



☆津高版☆ 池の水を全部抜こう!! 大作戦

三重県立津高等学校 2021. 3

1. 学校行事や委員会活動紹介

学校長の言葉	1
スクールライフ	2
生徒会活動・生徒会行事	4
探究活動	5
キャリアプロジェクト「西村ゼミ」	7

2. 個人活動紹介

英語スピーチコンテスト	8
東京国際声楽コンクール	9
読書感想文	10
読書感想画	13

創立 140 周年 ～あなたの夢がかなう場所～

三重県立津高等学校

校長 大川 暢彦

「生き生き津高」は、本校の学校行事や生徒会活動、部活動等、本校生徒の一年の活動記録をまとめたものです。津高生にとっては、津高文化を振り返ることができる記録集であり、中学生の皆さんには親しみやすい学校案内としての役割を果たしています。

津高校は、明治 13 年に旧津藩校「有造館」を譲り受け、津中学校として開校し、明治 32 年に三重県第一中学校に改称され、大正 8 年には三重県立津中学校と改称されました。昭和 23 年には新学制の実施に伴い、三重県立津中学校と三重県立津高等女学校が統合し、三重県津高等学校が誕生し、昭和 30 年には三重県立津高等学校と改称され、現在に至っています。明治、大正、昭和、平成、そして令和の 5 代にわたる歴史を重ね、昨年、創立 140 周年を迎えました。

本校は、「『自主・自律』の校訓のもと、高い知性と教養を持ったリーダーが育つ学校」を目指し、日々教育活動を展開しています。また本校は、文部科学省から三重県で唯一 3 期目のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）にも指定され、大学や研究機関、企業と連携し、すべての生徒に探究的な学びも推進しています。SSHの活動等を通じて、探究心に溢れ、創造性・協働性・課題解決能力等の資質・能力を高め、国際社会で活躍できる人材に育ててほしいと思っています。下にある絵は、昨年度の本校学校説明会に参加された中学生の皆さんに配布したクリアファイルのデザインで、本校生徒の作品です。



「創立 140 周年 ～あなたの夢がかなう場所～」

津高生は、学習だけでなく学校行事や生徒会活動、部活動、SSH、人権学習等様々な活動に熱心に、主体的に取り組んでいます。体育祭や文化祭、レクレーション大会等の学校行事は、生徒会が中心となって企画・運営しており、それこそ津高校の校訓である「自主・自律」の精神を体現しています。

これからも、津高生が生き生きと充実した高校生活が送れるように、教職員・生徒が一体となって頑張っていきます。皆さんも一緒に新しい津高校の歴史を創りましょう。

School Life

前期

4月

始業式・着任式・入学式、HR写真撮影
1年オリエンテーション
定期健康診断、面談週間、遠足
縦割りディスカッション、全学年確認テスト

5月

前期生徒会役員選挙、定期健康診断
県総体

6月

前期中間考査、教育実習
東海総体、2年生修学旅行

7月

夏季レク大会
保護者会、「自分探し」、夏季課外

8月

夏季課外、「自分探し」
全学年校内模試
中学生対象津高入門講座・見学会

9月

文化祭、前期末考査



School Life

後期



芸術鑑賞、体育祭
後期始業式、防災訓練
面談週間
後期生徒会役員選挙

10月

創立記念日(1日)
3年校内模試

11月

1・2年後期中間考査
3年学年末考査
3年特編授業

12月

1・2年校内模試
大学入学共通テスト

1月

SSH 研究成果発表会
国公立大学前期試験
卒業を祝う会(同窓会)

2月

卒業式、1・2年学年末考査
国公立大学後期試験
春季レク大会、修了式

3月

「生徒会長になって」

1年 林田 智輝（名張市立北中学校）

津高校では「自主・自律」のもとに有志の生徒が中心となり生徒会活動を行っています。活動内容は主に体育祭や文化祭、レク大などの行事の企画・運営です。会長はその行事で挨拶をしたり、対面式のなどの準備をします。今年は新型コロナウイルス感染症の影響で上記の行事が縮小・中止され、思うように活動できない日々が続いていますが、誰もが楽しめる学校生活を送れるよう生徒会全体で学校行事を盛り上げています。

「レク大担当として」

2年 上中 咲空（南が丘中学校）

今年のレク大では、密を避けるためバスケットボールなどの競技をとりやめました。また、体育館競技は無観客試合となり、応援もできなくなりました。しかし、代替競技として行われた e スポーツは大きな盛り上がりを見せるなど規模が縮小している中でも楽しむことができました。人との関わりが少なくなる今だからこそクラスメイトとの繋がりを強く感じられるレク大となりました。

「文化祭担当の役割」

2年 山本 真緒（南が丘中学校）

文化祭は2日間行われる津高の一大行事です。初日は三重県総合文化センターで行われ（非公開）、2日目は一般公開し本校で行われます。しかし、今年は新型コロナウイルスの影響で残念ながら非公開の部はなくなり2日目も一般公開せず校内の発表だけとなりました。今年は密を避けたり、アルコール消毒を徹底したりと感染症対策に気を配りながらクラスで一致団結して企画発表しました。私たち生徒会はより多くの人に楽しんでもらえるように各クラス・クラブの援助やパンフレットの作製を行い、企画を支える重要な役割を担います。文化祭の仕事は大変ですが成し遂げた後は大きな達成感があり、やりがいもあります。



文化祭アーチ



文化祭ジェットコースター



レク大 サッカー



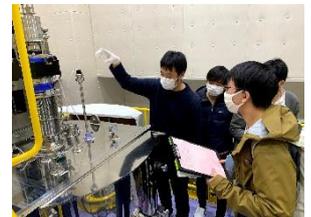
レク大 バレーボール

探究活動

津高校では、全校生徒が3年間にわたって探究活動に取り組みます。研究テーマの設定から研究の進め方、実験・調査の方法まで生徒主体で、文理選択の枠を超えて協働しながら研究を進めていきます。人文科学・社会科学・自然科学の分野を問わず、自分の知りたいことをとことん研究できます。

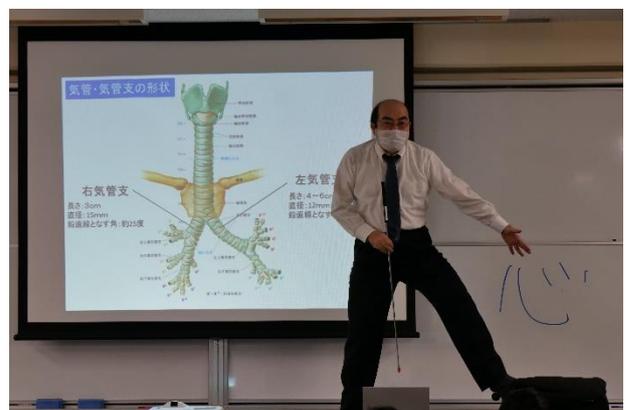
1年生

探究の基礎づくり(「リベラルアーツ」)、夏季フィールドワークや試行的な課題研究などをおして「探究」のための基礎的知識や技能を習得します。



2年生

1学年時に取り組んだ内容を基礎として、本格的に研究を進めていきます。大学の研究室や企業等を訪問するなど、より専門的な知識・技能を習得し、研究を深めていきます。そして、SSH児童・生徒研究発表会で研究成果を発表します。





3年生

研究成果を論文にまとめ、学会等で発表することをおして、高校卒業後の学びにつなげていきます。



発表会等

- ・みえ科学探究フォーラム 2019(2/15)

パネル発表「安濃川のスムウキゴリとその生息環境」(最優秀賞)

パネル発表「地温を推定する公式をつくる」(優秀賞)

口頭発表 「腸まで届け乳酸菌～乳酸菌をどのような食品と同時摂取すれば効果的に腸まで届くのか」(優秀賞)

SSC 生物部会 2名 Good Performance 賞

- ・令和2年度 スーパーサイエンスハイスクール 生徒研究発表会 出場

「虫が色を見分ける要素についての考察」

(下の画像は 2019 年の様子)



津高校は文部科学省より科学技術・理科・数学教育を重点的に行う学校「スーパーサイエンスハイスクール (SSH)」の指定を受け、将来、国際的に活躍する科学技術系人材を育成するための取組や、大学・企業等と連携した教育を推進しています。

津高キャリアプロジェクト「西村ゼミ」

三重大学副学長・西村訓弘先生の指導のもと、「三重県の活性化」をコンセプトにゼミ形式で討論し考えをまとめ、班別に提案するという活動をしています。

第10回となる今年度は、「三重の地域を元気にしよう」というテーマのもと、「三重県にあるものを活用しながら、どのように地域を活性化できるか」ということについて考えました。それぞれの班が独自のアイデアを出し合い、ゼミでの討論や西村先生からの助言を経て、具体的な形にしていくことができました。

【各班のテーマ】

1班「結婚記念日をみんなで祝おう！in紀北」

その地域にしかできない最高のおもてなしを提供する企画。特別な記念日を紀北の雄大な自然の中で過ごしてもらい、地域の魅力を実感してもらう1泊2日のプランを提案。



2班「〇〇電車」

電車を特別な空間に変えて利用者を元気にする企画。ペットと共に旅する電車、足湯で心も体も癒やされる電車、オンラインゲームとコラボした電車などを提案。

3班「三重定期便」

どこにいても三重の特産品を楽しんでもらえる配送サービスの企画。その季節の旬の食材を送る、食材を全国に「おすそわけ」するなど、送った人も受け取った人も元気になる取組みを提案。



【参加生徒の感想（一部抜粋）】

1年 細渕 真理菜（名張市立北中学校）

発表を重ねていくうちに、自分や他人の意見をプレゼンに反映させていくことが大切だとわかりました。面倒だからと妥協したポイントを西村先生が指摘してくださったので、妥協せず自分が納得するまで考える重要さがわかりました。

2年 田中 智貴（三重大学教育学部附属中学校）

このゼミに参加することで日々の授業では得ることが難しい社会に出た時の実践的な能力（多角的に物事を見る力など）をつけることができました。実際考えた企画が本当に社会で成り立つのか、可能なら将来実践してみたいと思います。

2年 手平 奈津実（鈴鹿市立鼓ヶ浦中学校）

ゼミでの考える力は探究活動でも活かすことができました。起こりうるいろいろな場面を考える力は普段の学習計画を立てるときでも役に立つと思います。大学でもこのような地域の課題解決について学びたいです。



三重県高等学校英語スピーチコンテスト

小川 結珠音 (名張市北中学校出身)

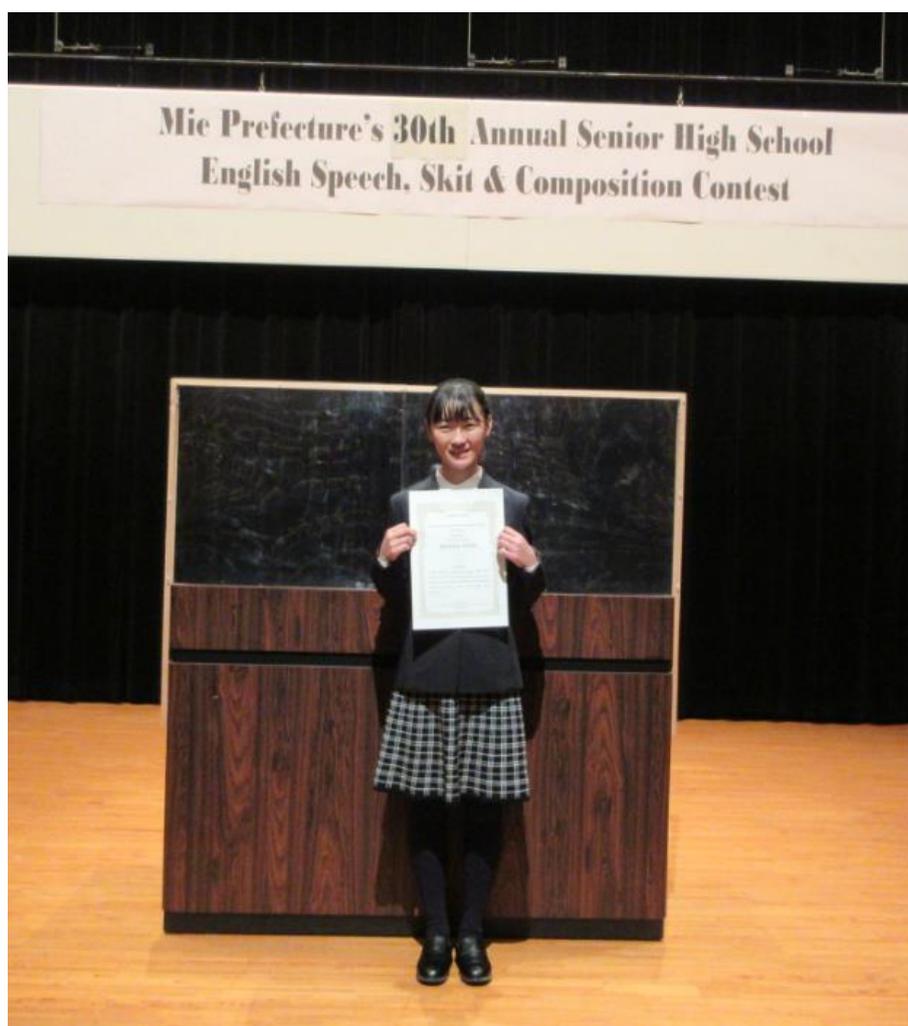
私は10月17日に三重県高等学校英語スピーチコンテストで2位に入賞しました。

テーマは新聞で目にした「食品ロス」にしました。世界規模の問題ではあるけれど、解決のために私ができることがいくつもあるなと感じたからです。

また、原稿の推敲やスピーチの練習でたくさん先生にご指導いただきました。テーマを深く掘り下げて考えることができたし、ジェシカ先生と会話するときにネイティブの英語に触れることができたので、とてもよい経験になりました。

本番は「伝える」ことを意識して発表しました。5分を超えるスピーチだったので終わったときには大きな達成感がありました。さらに、他の学校の生徒の発表をきくことも勉強になりました。バイリンガルのコンテストたちはとてもフレンドリーに英語で話しかけてくれて、刺激になったし、外国に行ったら、こんな感じなのかなとわくわくしました。

これからもっと英語にスキルを身につけてたくさんの人と話せるようになりたいです。



一人で立つ舞台

高木陽日（三重大附属中学校）

私は、2020年10月17日、東京国際声楽コンクール本選に出場し、5位に入賞しました。私は音楽部に所属していますが、今年度は新型コロナウイルスの影響により、コンクールが全て中止となりました。合唱で思うように活動出来ないことから、新しいことに挑戦してみようと思いました。

独唱の形式となる声楽コンクールは、これまでずっと合唱をしてきた私にとって初めての経験ばかりでした。合唱は他の人と合わせることが求められますが、声楽はまったく逆です。誰も頼る人がいないため自身で表現しなければいけません。練習し始めたときは、自分でメロディーを進めていくことができなくて苦戦しました。どうしても伴奏のピアノを聴いて合わせてしまうからです。

このコンクールは地区大会、準本選、本選で構成されています。地区大会では声楽の先生の知り合いの方が伴奏をしてくださっていましたが、準本選や本選では初対面の公式伴奏者をお願いしました。公式伴奏者とは、コンクール側が引き合わせてくれるプロの伴奏者です。自分がどう歌いたいのか、私自身が言葉と歌で公式伴奏者に伝える必要がありました。意見を伝えるのは緊張しましたが、良い経験になりました。

これまで私は、他の人とどう合わせていくかばかり考えていました。人と関わる中で協調性はとても大切です。しかし時には、自分の意思をはっきり主張することが大切になることもあるということ学びました。



第65回青少年読書感想文全国コンクール

三重県審査 優秀賞
心を写すこと、移すこと
1年1組 大杉 遥子

『キャパとゲルダ 二人の戦場カメラマン』マーク・アロンソン著
あすなる書房)

今、私達が生きるこの世界は明るいモノで溢れている。少し窓の外に目を向けるだけで人それぞれの服装と手入れされた草木、咲き誇る花が風に揺られ、色とりどりの車が通りかかってマンションの角を曲がってゆくのが見える。夜になれば華やかな電灯がキラキラと輝いている。動画や写真はカラーが当たり前で、情報はいつでもどこにいても手に入る。そんな世界で生きてきたからだろうか。それとももっと別の理由があるのだろうか。私はこの本に掲載されている写真に、とてつもない衝撃を受けた。私の心臓を掴んで離さない写真、と言っても言い過ぎではない。それほど印象を与える写真だった。

写真、と言っても私達が普段見慣れている美しい色彩の写真ではない。白黒の写真である。白黒の写真であることにも関わらず、恐怖心を煽る第二次世界大戦中のスペインの生活が撮影されている。その当時、生きておらず、スペインに行ったことがない、そして何より戦争が恐ろしくて直視できない私が、なぜこんなにもこの写真に惹かれたのか。その理由は二つある。一つは、印象的な写真を撮影する二人の戦場カメラマン、キャパとゲルダの力強い人生を知ったということだ。

一九三四年、二人はパリの写真撮影で出会う。貧しいが明るい写真家、キャパは魅力的な美女、ゲルダに一目惚れし、やがて二人は一緒に人生を歩んでいく。キャパはゲルダに撮影方法を教え、ゲルダはキャパのマネージャーのように彼を支えた。二年後、スペイン内戦が始まる。二人は戦場カメラマンとしてスペインの生活を積極的に撮影し、情報の少ない世界の「目」になっていく。それから一年後、単身ブルネテで撮影を行っていたゲルダは戦車に轢かれ、亡き人となってしまふ。ゲルダを失ったキャパは戦争に疲れ、戦場カメラマンを辞めたいと思う日もあったが、第二次世界大戦後もアジア地域で戦時下の生活を撮影し続け、一九五四年、インドシナ戦争で地雷を踏み、命を落とす。

私が真っ先に考えたことは、「なぜ自ら戦火に飛び込んでゆくのだろうか」ということだった。その決定的な証拠は、写真の中にあった。二つ目の理由にも関わる、写真の力強さだ。

命を懸けて撮影された写真からは、白黒でもその状況が鮮明に伝わってくる。写真の技術が高度だったから伝わりやすい、これも理由の一つだと思う。しかし一番の理由は、決して戦争から目をそらさず真っすぐ見つめ撮影したからであると考えている。私は戦争を真っすぐ見つめたことがあっただろうか。答えは否、だ。この写真を見て、こんなにも心を揺さぶられるから。二人の人生に憧れるから。力強さに圧倒されるからだ。

印象に残った写真の一枚に、ゲルダが撮ったスペイン内戦でファシズムと戦う訓練を行う女性兵士の写真がある。その女性は一人で砂浜に片膝をつき、手に拳銃を持って狙いを定めている。年齢は私よりひと回り年上で大学生くらいに見える。自国を生まれ変わらせようと武器を手取る女性もまた、命を懸けている。真っすぐに狙いを定め、背はピンと伸び、力強い。だから私の心に残る写真だったのだろうか。

この本を読み、また写真を見て、私は自分が生まれる前の暗い世界を見た。いや、暗いと感じるのは、私達が今を生きているからだろう。私が暗いと感じる世界は、きっと当時は明るくて新鮮で、希望に満ちていたに違いない。命を懸けた写真は当時の人々の唯一の信じられる情報であり、世界の目であった。そして今でもなお衰えず、力強さを伝えてくれる。写真が伝える事柄は、キャパとゲルダのようにその人の視点によって違いがある。また被写体によっても変わる。何より、時代によって人々の受け取め方が違うので、様々な人々が一人ひとり命を懸けて世界を真っすぐに見つめ伝えていくことが私達の生きていく中での任務だと思う。それを受けとめることも重要で、十人十色の世界を認め合える世界にしたいと心から思う。今から私がすべきことは、恐ろしいことから、辛いことから目を背けないこと。自分の中で一瞬を見極め、伝えること。伝えられたことを受けとめ、考えること。命を懸ける、すなわち一生懸命力強く世界に貢献できる自分の道を歩むことだ。

キャパとゲルダの写真は、第二次世界大戦の生活を赤裸々に捉えた、戦争の残酷さを表す証人である。その写真から、歴史を学び二度と戦争を起こしてはならないという思いはさらに強くなった。もう私は戦争から目を背けない。被写体の心の叫びが聞こえてくる。「戦争を終わらせて」という声が。私の心を揺さぶる声が。私は戦争がなく、平和な世界を世界の目となって写したい。明るいモノを写し、人々の心を平和な世界に移したい。すべての人々が、戦争ではなく平和に命を懸けられる、そんな輝く世界を実現するために。

三重県審査 優秀賞

人類の罪

1年4組 橋本 脩

(『ある晴れた夏の朝』 小手鞠るい著 偕成社)

自宅の本棚でこの本を見つけた時、戦争・原爆を題材にした本ならば、感想文も書きやすいだろう、そんな軽い気持ちで選んだ本だったが、読み進むにつれて、ただ単に原爆や戦争に異を唱えるだけの小説ではないと分かった。今までの自分の考えが一八〇度変わってしまう、簡単には感想が書けない、とても考えさせられる内容だった。

アメリカの高校生たちが「原爆の非を問う討論会」を開催。原爆肯定派、否定派に分かれ意見を出し合いながら、戦争、人種差別など様々な角度からこの問題と向き合っていく。

原爆を投下された世界で唯一の国、この「日本」では誰もが原爆・戦争に対して否定的な考えを持っている。私も同じだ。原爆は必要悪だと肯定する人がいるなんて、考えたこともなかった。

否定意見には、一般人を犠牲にするべきではなかった、アメリカの力を見せつけるための人体実験だったのではないか、人種差別(白人国家には決して落とさないであろうという差別)があったのではないかというものがあつた。

しかし反対に、原爆は戦争を終息させるためには必要な手段だった、日本が予告なしに行つた真珠湾攻撃に対する当然の報復だった、そして南京大虐殺など、日本が他国の市民に行つた行為を考えると、広島・長崎の人々が原爆の犠牲になつたのもしかたがない、など想像もつかない「肯定意見」も多数あつた。

私はもちろん、原爆は悪だと思っている。何の罪もない沢山の人が一瞬にして亡くなつた。助かつたとしても、火傷を負つたその姿は想像を超える酷いものだったと教わっている。日本が行つたことを考えれば「原爆を投下されて当然」と考えることができるなんて信じられない。だから、原爆肯定派の意見はとても理解できないと思っていた。しかしこの本を読み終えて、今までの考えは私が日本人だからこそ持つ考えであり、自分が日本人ではなく、外国人として原爆について考えてみたら——どうだろう。「原爆肯定」という違う考えを持ってもおかしくないのでは、と少し理解できるようになつた。

実際に、核の研究は京都大学でも行われていたという事実を八月一五日のNHKの「太陽の子」というドラマを観て知つた。アメリカより先に核を開発していたら、日本が原爆を兵器として利用していたかもしれない。

「こんな事実があつたのか」と衝撃をうけた。日本は世界で唯一の被爆国と主張する事に疑問が芽生えた。そして、どの国が悪いなどと議論している場合ではないと思つた。日本も核の研究をしていたのだから…。

私は、数年前の八月六日、ヤフーニュースで読んだアメリカに留学した日本の女子高校生の話を思い出した。留学先はワシントン州にある高校。長崎に投下された原爆のプルトニウムが生産された町だ。その高校のシンボルマークは「きのこ雲」であり、校章やパーカーなどに使用されている。きのこ雲を誇りに思っているかのようにあつたそう。そこで勇気をもって「原爆は誇りを持つることなのか?」「原爆はどんなにひどい物なのかわかっていいますか?」と疑問を投げかけると、同級生から、日本人の意見を聞くことができよかつた、と大反響を呼んだという。彼女は勇気を出して、アメリカで疑問を投げかけてよかつたと話していた。

この本から、原爆については被害を受けた側と投下した側双方の意見、考え方があつたということを学んだ。そして完全にはお互いを理解できなくても、意見を交換し、理解しようと努力することの大切さを私は強く感じた。

原爆投下は許されるものではない。その考えに変わりはないが、今は自国を正当化する

内容が教科書等を通じて子供たちに伝わっているのが現状だ。学校では良い面も悪い面も、真実を伝え、様々な視点からの見解を教えるべきだ。その上で自らの考えを持ち、過去の過ちを認めるべきは認め、相手を理解することが大切だ。そして一方通行の情報を信じるだけではなく、「自ら考える」ことが今の私たちには欠けている。そう私は思った。

今も世界中で戦争、そして武器を必要としない貿易戦争など、本当に悲しい出来事が起こっている。お互いの意見を素直に聞き、理解しようと努力することはできないだろうか。戦争で沢山の命を犠牲にした。その事実から世界は何も学んでいない。なぜ戦争や原爆で一般市民が犠牲にならなければならなかったのか。私たちは今、心から考えるべきだ。

この本の討論会の最後は、戦争・原爆は「人類の罪」であると締めくくられている。どこの国が悪いという問題ではない、人類全体が犯した罪なのだ。そのことに全ての人々が気付かなければならない。でなければ、平和な世界は決して来ない。

「人類の罪」、それを教えてくれたこの本に出会えたことを、私は感謝したい。

第32回読書感想画三重県コンクール 最優秀賞 矢田 陸人 (鈴鹿市立大木中学校)

私は、昨年と2年前の読書感想画コンクールに応募し賞を頂きました。今年も指定図書に応募することにしました。

<作品について>

「戦場の秘密図書館：シリアに残された希望」

マイク・トムソン著 小国綾子 編訳 文溪堂

私はこの本を読んで、シリアの内戦の厳しい状況を知り、衝撃を受けました。また、自分が普段生活している日々がいかに平和なのかを思い知らされました。私は、家族や友人を殺されたり、食料の供給を止められたりしても、最後まで政府に抵抗し続けたダラヤの人々のことが強く印象に残っています。ダラヤの人々にとっての図書館は、本が唯一の「希望」でした。その「希望」をどのように絵で表現するのか何度も悩みましたが、上手く画面に表すことができたのではないかと思います。



第32回読書感想画三重県コンクール 優秀賞

森彩音 (鈴鹿市立鼓ヶ浦中学校)

私は「もえぎ草子」という本に描かれた、身分差に負けずにもがく主人公の姿に感動しました。

主人公は貴族たちの身勝手な言動によって、まるで人間がありをふみつぶすかのように、一瞬にして全てを失います。私はそんな現代社会にもまだ存在している、簡単には解決できないような問題や理不尽なことを、主人公の状況を重ねあわせながら、この絵を描きました。はっきりとした身分差を表現するために、白色とカラフルな色の対比を意識しました。また、今までよく知らなかった平安時代の知識や、十二単の描き方などを学ぶのは楽しくもあり、大変でもありました。歴史や古典の授業で習ったことなどが活かされ、さらに興味をかきたてられました。あまり慣れない版画でしたが、よい経験にもなりました。

私は主人公の権力や身分にあらがう勇気と強さに憧れました。そんな主人公のように私もこれから苦しいことがあっても、諦めることなく希望を持ち、立ち向かっていきたいです。

